（別紙２）

審査の結果の要旨

氏　名　　神田（かんだ）　祥子（しょうこ）

本論文は夏目漱石の初期作品を対象に、作者の科学観、美術観を検証し、そこに当初秘められていた、ジャンル横断的な独自の「文学」概念を検証した論考である。

構成は全三部からなる。第一部は科学との関わりから、「倫敦塔」「カーライル博物館」「琴のそら音」の三作品が検討されている。科学的合理性への信仰が増せば増すほど、逆にそれでは捉えきれぬ情緒が文学の課題となることに漱石は常に意識的であった、という観点から、そこに浮上する二十世紀独自のロマンティシズムの様態が分析されている。漱石の参照したエインズワースの『ロンドン塔』への書き込みから、「倫敦塔」執筆にあたって「死」の不条理がテーマとして見出されていく過程を実証的に明らかにした上で、イギリスの世紀末芸術と、漱石に潜在していたロマン主義的要素とが呼応し合う様相を分析したくだりは、比較文化史的な視点からも興味深いものである。

第二部は美術との関わりから、「一夜」「幻影（まぼろし）の盾」「薤露行（かいろこう）」「草枕」が検討されている。漱石はレッシングの「ラオコーン」に強い関心を示しており、蔵書の書き込みを通して、造形芸術と言語芸術との相違に関し、独自の考えを培っていったプロセスが明らかにされている。論者によれば、初期の漱石は画に象徴される凝縮された美の時間を、小説のプロットに代表される継起的な時間に〝解凍〟し、あるいは逆に、もっとも理想的と考えられる時間を作中の絵画に〝凝縮〟してみせる、独自の方法論を持っていたのであるという。また、作中の任意の一部分を全体の筋から独立して鑑賞する「断面的文学」という概念にも注目し、部分と全体を等価に並立させる実験的な試みを、「草枕」を初めとする作品群から導き出している。詩歌、絵画など、さまざまなジャンルが混交したこの作品に、あらためて独自の視点から光を当てたものとして評価に値しよう。ちなみにこの「凝縮－解凍」理論は本稿の提起した重要な分析概念であり、今後、漱石の初期作品を分析する上で、有益な視点を提供するものと考えられる。

第三部は対社会意識という視点から、それまでの「科学」と「美術」の問題が統括されている。「趣味の遺伝」の分析では、メンデルの「遺伝」の理論が同時代の日本にどのように受容されたのか、また日露戦争に対する文士の認識はいかなるものであったか、が具体的に明らかにされた上で、それらに批評的に関わる当該作品の様相が明らかにされている。また、「虞美人草」に関しては、藤尾、小夜子らの登場人物を「凝縮－解凍」理論にそって分析し、従来「勧善懲悪」的内容と「美文」的文体とが時代錯誤的であるとして否定的に受け止められてきたこの作品を、あらためて職業小説家としての方法的な自己確立、という観点から再評価している。

「三四郎」「夢十夜」、写生文的作品など、他の主要作品の分析になお課題を残しているが、科学への信仰が生み出すロマンティシズムの様態、あるいはまた絵画と言語芸術との相互関係から、漱石がその初期に持っていた「文学」概念の可能性を掘り起こした成果は高い評価に値する。

以上の点から本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に値するとの結論に達した。